

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 八重樫 勝

お陰様で「第74回全日本中学校長会研究協議会大分大会」に、来年度の岩手大会の視察を兼ね参加してきました。10月25日から3日間、全国から約1800名の参加を得て4年ぶりの参集形式で行われました。二日目の分科会では、第7分科会「多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成」に出席しました。北海道の2つの校長会からそれぞれ発表があり、その内、函館市中学校長会からは、教員自身が率先してスキルアップを進められる体制整備の構築に向けて校長会が主体となったセミナーの開催、研修会の実施、OJTやOFFF-JTの取組の推進。学校ではキャリアステージに応じた取組として、初任層教員を軸としたメンター研修・若手教員による学校評価、ミドルリーダーの育成として校務分掌とは別のチーム（ICT、働き方改革、総合的な学習等）を編成して学校の課題解決に当たっている例などが報告されました。そのまま導入するには



様々な機会を通して学ぶこと

岩手県中学校長会 会長 中屋 豊

(盛岡市立厨川中学校長)

課題は多いものの、組織的な実践事例として参考になるものでした。最終日には約40年にわたりNHKのスポーツ実況に携わった工藤三郎氏による記念講演がありました。スポーツの名場面（大谷翔平選手も登場）を織り交ぜながら、根性論から科学的見地へ、指示命令の指導から自主性の尊重、都市から地方へ、勝利至上主義からプロセス重視（意識付け）へ、伝わることばと聞く力、などについて話され、スポーツに限らず共感や考えさせられることの多い示唆に富んだお話でした。来年度は岩手大会ですが、大分大会の運営を参考にしつつ、何より岩手で開催することの意義、柱立てをしつかり組み立てながら更に準備を進めたいと思います。

講演といえば、10月14日には県立宮古高校の創立100周年記念講演でアルピニストの野口健さんの話を聞く機会に恵まれました。生い立ちや自身が取り組んでいる環境保護、社会貢献活動、過酷を極める登山の出来事などを臨場感たっぷりに話して下さいました。その中で変わった日記をつけているという話をされ「自分のことについてSNSなどへの書込は見ないようにしているが、直接会って話をされたことは批判であってもそれを日記という形で書き残している。後で何か壁にぶつかった時に読み返してみると、そうかなるほど、と思うことがあり、自分を前に進めるきっかけになるものです。」と、確かそんな内容であったと思います。批判を書き残すにはメンタルの強さも必要であり、なかなかできることではないが、あえて前向きに解釈し、後で解決の方法・手段に置き換えるという発想に凄さを感じました。すぐ耳を塞ぐのではなく、中には自分の背中を押してくれることばもあるかもしれないの思いを持ちながら受けとめたいものです。

未来を担う子供たちには、様々な変化に主体的に向き合うとともに、他者と協働しながらよりよい社会を形成していく力を身に付けることが求められています。私たちは様々な機会を通して学び、これらの具現に向けた教育への期待に応えるために力を尽くしたいと思います。

いわての防災教育～その4～



地域を愛し、地域の復興・発展を支える「ひとづくり」

野田村立野田中学校 校長 菊池 勉

I 事業の概要

本校区は、沿岸北部に位置し、東には野田湾、三方は山が連なる山間地域である。村内には3つの川が流れており、近年、土砂災害や洪水に関する防災マップを村が更新するなど、津波以外の災害への対策が必要な地域となっている。

東日本大震災では、様々な被害を受けた本校区である。しかし、震災直後から、本校では、地域の復興・発展を支える「ひとづくり」を教育の根本に据え、その実現に向けて、学校・家庭・地域が協働して教育活動の充実を図ってきた。特に復興・防災については、子どもたちに社会参画を意識した取組を体験させ、地域との関わりをもつ活動を展開してきた。そこで本稿では、震災後12年にわたる本校の取組の一部を紹介したい。

II 取組の概要

1 「復興のまちづくり」へ参画する取組（都市公園の整備）

平成24年、生徒たちは、村からの要請を受け、防災や地域交流の場などの機能をもつ「都市公園設計」のアイデアを提案すること

になった。

この取組では、初めに村や設計会社から「まちづくり」と「都市公園計画」に関わる案の説明を受けることからスタートした。生徒たちは、それらの案をもとに、自分たちの視点から「野田村都市公園」づくりの「アイデアコンテスト」を作成した。コンテストは、10人を1つのグループとして作成し、作成後は、互いに持ち寄り、「都市公園ワークショップ」を実施した。このワークショップでは、各グループによるアイデアの交流に加え、村の担当者や設計コンサル



十府ヶ浦公園での創作太鼓演奏

タントから感想をいただく場を設けることで、アイデアをブラッシュアップした。

ワークショップの後半では、交流したアイデアを「観光」「自然」「施設」などのカテゴリーに分類し、これらのカテゴリーの優先順位を話し合うことで、公園だけでなく、まちづくり全体を俯瞰する必要性を理解する場となった。

現在、生徒たちが考えた案の一部を取り入れて整備された公園は、「十府ヶ浦公園」として、津波からの防災機能をもつほか、憩いの場やイベント会場等、村民に親しまれる場となっている。

2 「太陽プロジェクト」の取組

つなぐ「創作太鼓」の取組

「野田村の太陽になろう」この言葉は、平成25年に東日本震災後の村に笑顔や元気を与えたという想いから生徒の発案で生まれたものである。

この言葉を具現化する取組が「太陽プロジェクト」である。「太陽プロジェクト」では、岩手県が示す復興教育の3つの教育的価値へ本校独自に「つたえる」という価値を加えた4つの教育的価値に基づく内容で構成し、復興・防災に関わる諸活動を展開している。

太陽プロジェクトの主な内容は、「防災学習」、「地域学習」、「地域貢献」等の内容で構成されており、内容を体験的に進める本校教育活動の柱となっている。

この太陽プロジェクトの集大成として位置づく取組が「創作太鼓」である。創作太鼓は、学んだことをもとに、自分たちの地域や復興への想いや願いを示す表現活動である。

創作太鼓の演奏で使う太鼓は、震災瓦礫で作られた「再生和太鼓」、「古タイヤを使った「輪太鼓」、「竹太鼓」、台湾や他校、個人から寄贈されたものを使用している。本校では、「震災を忘れない」ためにも、あえてこの完璧ではない太鼓での演奏を大切にしている。

創作太鼓の取組では、単純に叩かせることはしない。生徒たちが太鼓を叩く意味や意義を理解したと判断した段階で練習がスタートする。そのため、1年生の太鼓練習は12月頃に始まる。演奏曲は4曲あり、いずれも宮城県在住の邦楽作曲家の佐藤三昭氏が作詞作曲したものである。佐藤氏により決まった譜面はあるものの、生徒たちは、前年の演奏をそのまま踏襲することはしない。創作太鼓は、学年ごとに復興への想いや願いを話し合い、表現の仕方を考え、「創り上げていく」ものとしていることから、毎年、表現が少しずつ異なっている。

各演奏曲を習得する順番に決まりはしないが、基本的に1年生は「野



創作太鼓（3年生）

田中囃子」2年生は「路（みち）いざ歩まん」、3年生が「陸奥」幕開」をそれぞれ習得している。3年生が披露する場合は、積み上げてきた4曲を披露している。演奏曲のうち「路」は、昨年度、戯曲化し、言葉や身体での表現を多く取り入れている。生徒たちは、演奏前に、セリフと動きでメッセージを発する。このセリフの一節には、「いざ往かん 生かされたる者として いざ歩まん（中略）未来に繋ぐこの路を」とある。生徒たちは、震災から立ち直る故郷への思いや未来への決意を込め、様々な方法で表現する。

この創作太鼓の演奏については、「体育祭」「文化祭」に加え、「野田まつり」「野田村文化祭」等のイベントでも披露し、村民の方々へメッセージを送る取組となっている。

3 「逃げ地図」作成・発信による防災意識向上の取組

令和4年3月、村は「土砂災害・洪水防災マップ」を公表した。

「逃げ地図」の取組は、村の状況を踏まえ、「生徒が災害から身を守るができること」、「高齢者や幼児などの目線で避難時間や避難場所までの道路状況を確認すること」、「避難時の留意点について地域へ発信すること」等を目指し、活動をスタートさせた。

本取組の対象は、学区とする8地区とし、各地区に居住する3年生が調査にあたることとした。

調査前には、村の防災官から、避難するためには、ハザードマップを補う具体的で分かりやすい地図が必要であること、避難経路は実際に歩いて確認することが大切であることなど、地図作成のポイントについてお話をいただいた。生徒たちは、事前の専門家によるアドバイスにより、夏休み中のフィールドワークの視点を十分に確認した上で、活動することになった。

調査当日は、各自の自宅から最寄りの避難場所までの道路状況や危険箇所などを地区ごとに確認した。道路状況や危険箇所は、津波災害時の危険箇所（津波浸水区域）、洪水危険箇所（増水時に横断がでない箇所）、土砂災害危険箇所（河川増水時の土砂災害）、地形・気候に関わる危険箇所（低地、障害物、凍結など）などについて、タブレットで撮影したり、村の防

災地図上にメモしたりすることで確認した。また、危険箇所を避けたルートでの避難場所までの所要時間を高齢者等に合わせたスピードで測りながら確認し、地図にまとめあげた。

その後、村の防災官から、調査結果に基づいた着色の方法、表記等のアドバイスを受けた上、拡大した村の防災マップへ、避難路ごとの所要時間、安全に避難できる道路などを8種類に色で分けて示し、「逃げ地図」が完成した。

このようにして完成した「逃げ地図」は、村長や村職員に対して説明したり、村内の小学校・高等学校等に出向いて説明したりする機会を設け、発信・共有した。



逃げ地図

本取組により、生徒たちは、防災官から指導を受けることで、村全体を考えながら、命を守るため

の具体的な留意点等を提案する体験の機会を得ることができた。また、フィールドワーク、地図作成、発信という取組の流れを経ることで、生徒自身の防災意識を高める機会となった。

本年度の3年生は、現在、「津波」に特化した「逃げ地図」を作成している。本校区では、村から「津波からの避難時間は、32分以内に国道よりも西に逃げる必要がある」との目安が示されていることから、村内各所から安全で最も近い「避難場所」と、そこに避難するための「所要時間」等を確認している。今後、新たな村の津波浸水区域ハザードマップを活用して、「津波特化版 逃げ地図」を完成させる予定である。完成後は、村内外で発信したい。

Ⅲ まとめ

本校の復興・防災に関する取組は、「地域の復興・発展を支える」という観点に立ち、地域の人・モノ・コトとの関わりを重視している。これまでの取組の生徒への影響を諸調査の結果に関連させてみると、「自己有用感」や「地域に貢献したい気持ち」等で大きな高まりがみられている。

生徒たちの意識や意欲の向上を図るため、今後も当事者意識を持たせながら学習させる必要がある。引き続き、生徒たちを村の復興や防災に具体的に関わらせ、災害時に当事者となった場合でも適切に考え、判断する力を育成していきたい。

地区会だより

紫波地区会

4年ぶりの研修会・親睦会を開催

8月26日(土)、紫波グリーンホテルにおいて、4年ぶりに紫波地区会の研修会及び懇親会を、退職校長会紫波地区会と合同で開催しました。

研修会では、岩手県支部副支部長川村祥平様、紫波町教育委員会教育長佐美淳様、矢巾町教育委員会教育長菊池広親様の3名のご来賓にご出席をいただき、日本教育会終身会員9名、現職会員32名と、退職校長会会員4名の参加の



研修会の様子

と、(株)バンザイファクトリー代表取締役高橋和良氏をお迎えし、「教育は全ての業務に優先する」と題し、ご講演をいただきました。

はじめに、ご自分の生い立ちや取り組んできたことのお話から始まり、東日本大震災後に、気仙地区で復旧に取り組んできたこと、椿茶の開発に取り組んだ経緯、地元の復興のために仕事を増やし、障害者施設との業務提携もしたこと、その取り組みをきっかけに地域学習のための「椿学習」を始めたことなどが話され、その「椿学習」の内容も講演いただきました。

講演の最後には「達成したい夢ができたとき、達成するために必要不可欠なのが勉強プラス情熱。そのことを伝えていきたい。」と、熱い思いも語られました。

その後の懇親会では、皆、この日を待ちわびたかのように、笑顔になり、会話も弾み、瞬く間に時間が過ぎました。

(事務局長 藤澤 崇)

(一財) 岩手県教育振興基金の公益事業 岩手育英奨学会へ185万円助成 新任校長・副校長先生方からのご寄附

一般財団法人岩手県教育振興基金から公益財団法人岩手育英奨学会への「助成金贈呈式」が、令和5年10月19日(木)午後3時半から、県庁の岩手県教育委員会教育長室で行われました。

今年度は、令和5年度小中高特支の新任校長・副校長の先生方から寄せられた寄附金185万円を、八重樫勝理理事長から岩手育英奨学会の佐藤一男常務理事に贈呈



佐藤一男常務理事(右)と寄付金を贈呈した八重樫勝理理事長

されました。八重樫理事長は挨拶の中で、「生活が困窮している子どもたちのために少しでも役に立てていただきたい」と述べ、佐藤常務理事から「大切にに使わせていただきます」とお礼の言葉がありました。

岩手県教育振興基金は、日本教育会岩手県支部の設立に関わった先達、支部運営に当たって経済的基盤が必要であると考え、昭和61年9月に設立し、教育の資産づくりを進めてきました。平成25年には国の法人改革で「一般財団法人岩手県教育振興基金」として認可され、現在に至っています。

一般財団法人に認可される際に公益事業として始めたのが、岩手育英奨学会への助成でした。新任の校長・副校長の先生方から、お一人1万円のご協力を賜り、一般財団法人岩手県教育振興基金からの寄付金と合わせ、その合計額を岩手県育英奨学会に寄付をさせていただきます。今年度で11年目になります。

岩手県教育振興基金

寄附者御芳名

(敬称略)

◆正会員

○県小学校長会 ○県中学校長会

▼盛岡地区(1名) 桑原玲子

▼岩手地区(4名) 金野晶子・吉田充

田中亨・石川和広

▼紫波地区(1名) 内川千亜希

▼花巻地区(4名) 小山文明・帷子誠

佐々木淳一・菊池一洋

▼北上・和賀地区(2名) 佐々木善成

藤原誠彦

▼胆沢地区(10名) 波田野誠・鈴木恵子

塚本岳也・高橋一彦・佐藤齊

小原陸子・吉田泰治・青沼徹

佐藤真・八重畑亘

▼江刺地区(1名) 高橋由佳

▼一関西地区(1名) 村上正和

▼一関東地区(2名) 藤原洋・菅原宰喜

▼気仙地区(8名) 高室敬・加藤末由子

高橋多鶴子・金野晋・新沼健

佐々木伸一・遠山秀樹・松村正博

▼釜石仙地区(3名) 千田有美

藤井敏朗・高橋信昌

▼宮古地区(8名) 宇部智康・松浦直樹

藤島洋介・芳賀郁夫・一ノ倉眞吾

平野智史・安保学・八幡一臣

▼下北地区(2名) 中軽米幸治

多田義孝

▼久慈地区(10名) 越田日和・柳原政樹

西野悟・佐々木慎一・齋藤光喜

佐々木裕美子・山口充・佐藤光

畠山和彦・中軽米央子

▼九戸地区(5名) 黒淵博文・吉田誠毅

中島和孝・徳田克幸・菊池勉

▼二戸地区(7名) 芳賀かつえ

佐藤伸之・吉田幹伸・石澤綾子

中島敬・女鹿芳文・八重樫晃生

(計69名)

○県中学校副校長会

▼盛岡地区(7名) 齊藤智彦

小笠原崇史・吉田孝仁・平田敬子

小山奈美子・高橋光広・似内美奈子

▼岩手地区(9名) 平澤和史・高橋弦

工藤信寛・岩渕忠徳・住田真由美

山根章広・大西優・小崎琢磨

伊藤伸

▼紫波地区(5名) 大平光江・中川由子

音石美奈子・城内千賀子・長谷川勝

▼花巻地区(2名) 佐々木勝義

桐越綾

▼北上・和賀地区(1名) 大川原章郎

▼胆沢地区(1名) 伊藤郁子

▼一関西地区(2名) 立花公樹

鈴木智行

▼気仙地区(2名) 村上優子・米沢俊哉

▼釜石地区(1名) 佐藤理恵

▼宮古地区(6名) 田村良利子

及川千暁・黒淵大介・平野美代子

伊勢寛臣・宅石忍

▼久慈地区(4名) 杉浦美香子

佐々木圭子・菊池理佳・藤野孝

▼下北地区(2名) 畠中知希・小原義幸

▼二戸地区(6名) 淵澤聡・高橋法哉

澤村里美・佐藤新・天沼淳子

大田友博

▼県立中(1名) 小原亮

(計49名)

スポット
その182

高橋一佳校長先生は、今年4月、本校第四十二代校長として着任されました。先生は本校の同窓生で、高校時



せん。

代は生徒会の中央執行委員として、本校の特色の一つである数々の生徒会行事を、時には学校に寝泊まりをしながら企画・運営に奔走されたと聞いています。その他にも、今年度45回目を数える本校

独自の海外派遣事業の第3期生として短期留学をされていることや、本校の寮生活を3年間全うされていることなどから、当時から相当な行動力とリーダーシップを発揮されていたことが窺えます。こうしたことから、校長先生が個性溢れる本校生徒のよき理解者であるということからは、疑う余地がありません。

現在、先生は岩手県高等学校長協会の会長をはじめとして数々の役職を担い、多忙を極めています。当時のエネルギーをそのままに、盛岡一高での充実した日々を過ごされています。

(副校長 和田健利)

今回は・(公財)岩手県育英奨学会への助成金一万円のご寄付をいただきました岩手県小・中学校長会の令和五年度新任校長様・同じく一万円のご寄付と岩手県教育振興基金へ五千元のご寄付をいただきました岩手県小中学校副校長会の令和五年度新任副校長様の正会員をご紹介させていただきます。

多額のご支援・ご協力を賜りましたことに衷心より感謝を申し上げます。

被災

平成23年3月11日。東北地方太



外観

はじめに

令和4年11月5日、中心市街地に陸前高田市立博物館が開館しました。壊滅的被害をもたらした東日本大震災発災から11年8ヶ月を迎えようとしていました。被災資料の安定化処理は今も続いています。全国の関係機関のご尽力により、社会教育施設としての機能に文化観光拠点施設としての機能を加えた博物館として新たなスタートを切ることができました。



地域に根ざした総合博物館 陸前高田市立博物館

副主幹兼主任学芸員

熊谷 賢



差し伸べられた手

被災資料の救出は、県内の博物館、教育委員会、自衛隊など多くの関係機関のご協力を得て、3月下旬から6月中旬まで行われまし



館内被災状況

平洋沖地震によって発生した津波は、半世紀以上にわたる市民の協力により収集された陸前高田の自然・歴史・文化を伝える博物館資料すべてを博物館ごとのみ込みましました。館内は瓦礫と化したさまざまなものが流入し、資料と瓦礫が混然一体となっていました。人的被害も大きく、被災資料の救出活動は困難を極めました。

た。被災資料は、海水の塩分によって錆やカビが発生し、劣化が進むため、それらを取り除く「安定化処理」が必要となります。しかし、津波により被災した資料の安定化処理は、国際的にも未確立な部分が多く、試行錯誤の連続でした。当館は総合博物館ですので、所有していた資料の素材は自然、人文など多岐にわたっていたため、それらの被災資料の修復は、それぞれの特質にあった処理を行う必要がありました。膨大な量の被災資料を目の当たりにして言葉が失いましたが、岩手県立博物館をはじめ、全国の博物館、大学が、被災した「陸前高田のたからもの」を残そうと手を差し伸べてくださいました。



ガレキの中に残された書置き

新しい博物館へ

被災資料の再生に向けた作業が進むにつれ、被害の大きさが徐々に明らかとなり、絶望感に襲われるようになった頃、流失した資料の発見を知らせる市民からの電話や、新しい博物館での展示に活用して欲しいと、化石や郷土人形などの資料寄贈が相次ぎ、その数は2000点を超えました。開館以来続いてきた市民との絆は、津波があっても失われることはなく、むしろ新しい博物館の再建を望む絆としてより強固なものに感じられ、博物館再建の原動力となりました。

受け継いだ展示

新しい博物館の常設展示では、展示資料の80%以上が震災で被災し、全国の大学、博物館の協力を得て再生されたものであり、このことを踏まえつつ、三陸の海をテーマの軸としたものであります。全体ストーリーは「陸前高田の海・大地、そしてそこに生きる人々の力に出会う」。震災前の二つの博物館の展示を受け継ぎながら、海を悪者にせず、その素晴らしさを伝えることを心掛けました。展示室で来館者を迎えるのは、震災直後の博物館に置かれた一枚の書置きです。「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な



奇跡の海 三陸

魚の王国と呼ばれる三陸の海の豊かさを、そこに生息する500種の魚の美しいアクリルアートで

② 奇跡の海 三陸

隕石を紹介しています。

日本列島の成り立ちを知る上で重要な陸前高田の大地について、氷上花崗岩、壺の沢変成岩といった当市の岩石や当市矢作町飯森地区、雪沢地区などの全国的にも著名な古生代の化石産地から発見された化石と日本最大の隕石「気仙隕石」を紹介しています。

① 大地の成り立ち

います。

9つの展示は次の順に構成しています。

宝です。」この書置きは、資料を残すことの意味を伝える博物館再生の象徴です。

次に基本となる9つの展示をつ

なく「発見の壁」が見えます。こ

の壁は、「感じ、考え、発見する」

をコンセプトに触れる岩石標本

や、縄文時代の骨角製漁具、津波

で止まった時計など各展示を象徴

する資料を展示しています。



海を崇め 海に抗わず 海と生きる

④ 資料が語る陸前高田の歴史

当市の歴史や民俗を物語る上で欠くことの出来ない県指定有形文化財旧吉田家住宅主屋、同吉田家文書、玉山金山、高田人形、日本一のオシラサマ、蔵手刀、墨書土器等の様々な資料を紹介しています。

⑤ 博物学の世界

紹介し、この豊かな海を支える陸

前高田の山・川・海の生物の多様

性を、美しい写真と豊富な剥製標

本で伝えています。

③ 海を崇め 海に抗わず 海と生きる

国指定史跡中沢浜貝塚をはじめ、水産日本のルーツと称される市内の貝塚から出土した釣針、鉾など300点を超す骨角器や令和5年3月に国の重要有形民俗文化財に指定された「陸前高田の漁撈用具」をとおして豊かな恵みをもたらす海と人々の生活を紹介します。

岩手博物界の太陽と呼ばれ、各

分野の多くの著名な研究者と親交

のあった当市小友町出身の鳥羽源

藏の多岐にわたる研究業績と、そ

の後継者であり、陸前高田市立博

物館を作り上げた千葉蘭児の業績

も併せて紹介しています。

⑥ 宿命とともに生きる

明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波に焦点をあて、過去の津波から学ぶことの重要性を伝えるとともに、津波を正しく恐れ、どのようにして生命と生活を守っていくのかを考えていただく展示です。

⑦ よみがえる博物館

東日本大震災での博物館の被災状況、被災資料の救出作業、「安定化処理」など文化財レスキューの過程と全国からの支援の様子を紹介し、再生した被災資料をご覧いただきながら、資料を残すことの意義と文化財防災について考えます。

⑧ 貝たちの部屋

11万点に及ぶ世界の貝類コレクションから色や形の美しい約2000点を展示し、貝の不思議を紹介しています。展示室中心の天井からは、日本最大で世界唯一、全長9・7mのツチクジラの剥製が、まるで海の中で来館者を見下ろしているように吊り下げられています。

⑨ 発見の部屋

縄文時代の釣針を使った釣竿で



貝たちの部屋

未来への約束

魚釣りをしたり、90箱の標本箱からなる陸前高田の昆虫の壁をみたり、さまざまな問題に答えたり、陸前高田の豊かな自然や歴史、文化について、子供だけでなく、大人も一緒に遊びながら学べる部屋です。ゆつくりと楽しめる部屋です。

「ここには陸前高田の人々が守り伝えてきたモノがあります。モノには物語があります。物語には人々のココロがあります。モノと一緒にココロを守り伝えていくこと。それが博物館の未来への約束です。」常設展示室入口の壁面に掲げた言葉です。

東北第1号の公立登録博物館として昭和34年の開館以来、守り続けてきたこの本質をこれからも未来に向かって守り伝えていきたいと思っています。

地域とつながる学校

西和賀町立沢内小学校 校長 菊池 正寿



本校は、平成23年4月に、沢内第一小学校・猿橋小学校・川舟小学校・貝沢小学校の4校が統合し、開校しました。学区は、奥羽山脈に囲まれた盆地に位置し、四季折々の季節を感じる自然豊かな環境にあります。一方、冬季には積雪が2〜3メートル程となる県内屈指の豪雪地帯でもあります。このような中で、全校児童59名が、元気に学校生活を送っています。

沢内では現在も「結^{ゆい}の精神」が大切にされ、互いを尊重し、助け合う風土があります。地域の方々の学校に対する支援や協力は厚く、地域学習でも大変お世話になっています。今回は「沢内甚句」と「森林環境教育」を中心にご紹介します。

運動会で4年ぶりの披露「沢内甚句」

「沢内三千石およねの出どこ榊ではからねで箕ではかる…」古くから歌い継がれてきた沢内甚句。コロナ禍を経て、運動会で4年ぶ

りに全校児童による唄・太鼓・踊りを披露することができました。唄は4年生、太鼓は5年生、踊りは全校児童で取り組みました。この間、沢内民謡保存会の皆様のご協力をいただき練習を進めてきました。民謡特有の難しい節回しや、踊りの繊細な手足の動きなどを、温かくご指導いただきました。運動会当日は、校庭にご家族や地域の方々、そして子どもたちの素敵な笑顔が広がり、うれしく思いました。

自然の恵みを学ぶ「森林環境教育」

3年生は、町の林業振興課からご支援をいただき「森林環境教育」を進めました。春のカタクリ観察に始まり、秋には森林伐採や木工工房の見学、薪割り体験も行いました。また、雪国文化研究所の小野寺聡先生にご来校いただき、カタクリの花の一生や、沢内に生育する樹木の特徴と生活との関わりについて学ばせていただきました。町の面積の9割を森林が占め、自然の恵みを受ける地域であるからこそ、豊かな森林を守り育てる

学びを今後も大切にしたいと考えます。

この他にも本校では、総合的な学習の時間を中心とし、地域と関連を図った学習活動を進めています。「生命尊重行政」を推進し、昭和37年に全国初の乳児死亡率0を達成した旧沢内村の深澤晟雄^{まさお}村長が目指した「命と健康を守る」自治を学ぶことや、介護の豊かさを「介護の魅力出前講座」を通して学ぶこともその一つです。沢内小学校は「地域とつながる学校」を目指す学校像として掲げています。今後も開かれた学校を推進すると共に、地域に学ぶことを大切にし、子どもたち一人ひとりの可能性を広げる教育を進めてまいります。



運動会に向けた「沢内甚句」室内練習会の様子

山寺の鐘

▼今年の夏は暑く、各地で猛暑の日の数更新が相次いだ。朝夕の冷え込みにある

の暑さを忘れかけているが、EUの気象情報連合が6〜9月の世界平均気温が観測史上最高になったと発表した。▼思い起こせば、氷河湖の決壊による町全体が土砂に覆われた洪水、熱波による世界各地での森林火災、乾燥地帯での豪雨、海水温上昇による台風の大規模化と進行速度の鈍化による被害の甚大化等々、自然の猛威が例年になくクローズアップされた夏でもあった▼教頭時代の2000年、校長の命で「学校現場の自然災害防災マニュアル」なる小冊子を作成した。その中で「このまま温暖化が進めば国内で100m/秒の暴風も：」などと誇張気味に記したことが、23年後の今日現実のものになった(台湾で95m越)。▼かつての異常が普通になってきた今日、「地球はどうなっているのか」ではなく「人知でどうにかすべき」として真剣に共有・具体化したい。未来を担う教育の意義や価値はここでも大きい。(雅)